

2015年5月30日 第二回 はじめに

門野 泉

「ミルワード神父のシェイクスピア物語」第一回（5月16日）の復習と解説

「ミルワード神父のシェイクスピア物語」の第1回の第1部のご講演では、神父様が英国で過ごされた幼年期、ウィンブルドン・カレッジ（Wimbledon College）に通学なさった少年時代とシェイクスピアとの関係をお話してくださいました。

神父様は、シェイクスピアの名台詞の意味が分かって分からなくても、先ずシェイクスピアの名台詞を暗記することでシェイクスピアの詩の響きに触れ、シェイクスピアの言葉が自然に頭と心に沁み通ったというご経験をお話になり、名台詞を幾つか紹介してくださいました。教育における暗記の重要性を実感させていただきました。

シェイクスピア劇との初めて出会ったのは、10歳の時、作品は『マクベス』とのことでした。この劇は、少年時代の神父様に強い印象を与えた劇となりました。少年時代を締めくくった劇は『ハムレット』との由。

1943年に北ウェールズのイエズス会の修練院に入られ、その後、オックスフォード大学に入学なさいました。エリザベス朝のイエズス会士で殉教者のエドモンド・キャンピオン（St.Edmund Campion, S.J., 1540-1581）にちなんで命名された“Campion Hall”で古典文学を学ばれました。日本への布教の許可が出た後、専攻を古典文学から英文学に変更され、シェイクスピアが神父様の学問の対象となりました。“Tutorial”では、全てのシェイクスピア劇について論文を作成なさったとのことです。シェイクスピアは劇の筋を物語や小説から取り入れたけれども、真の材源（sources）は聖書であるという重要なご指摘がございました。

第二部の対談に関しては、先ず、シェイクスピアの使った聖書に触れておきましょう。シェイクスピアの初期の作品では、1568年出版された英語訳の大判の主教聖書（*The Bishop's Bible*）の影響がみられます。この *The Bishop's Bible*（主教聖書）はカンタベリー（Canterbury）大主教の主唱で完成したフォリオ版（二つ折り本）英語訳聖書で、第二の欽定英訳聖書とも言われる聖書で、大判ゆえに教会に置かれていました。しかし、シェイクスピアの作品は、次第に誰でも入手可能な小型のジュネーヴ聖書（*The Geneva Bible*, 1560）の影響

が強くなりました。1560年に出版されたジュネーヴ聖書は、イングランドで迫害され亡命したピューリタンがジュネーヴ（Geneva）で出版した英訳聖書でございます。1582年に出版されたカトリックのリームズ聖書の影響も幾分感じられますが、当時、カトリック聖書をイングランドに持ち込むことは困難でございました。カトリック聖書に関して補足致しますと、リームズ・ドゥエー聖書（*The Rheims-Douay Bible*, 1582-1610；新約は1582年リームズ（ランス）で出版したことから *The Rheims Bible*, 旧約は1610年ドゥエーで出版したことから *The Douay Bible*）はウルガタ聖書からの翻訳で、20世紀まで、唯一のローマカトリック教会公認英訳聖書でございました。シェイクスピアを含む英文学を学ぶには、ジェームズ一世の時代、1611年に出版された欽定聖書（*The Authorized King James Version*）が有用であると神父様は助言くださいました。

第二の重要な点は、シェイクスピアを真に読み解くには三層を理解する必要がある。第一層は誰もが分かる表面的な部分、第二層はキリスト教、深層にはカトリシズムが存在する点を指摘されました。

最後には、神父様に倣って、神父様が少年時代に暗記された *Macbeth* の第五幕第五場で主人公マクベスが語る名台詞 “Tomorrow and tomorrow and tomorrow…” を “iambic pentameter” のリズムを意識しながら全員で朗読し、散会いたしました。